しずスポ SHIZUOKA SPORTS

愛知・名古屋 アジアパラ大会 2026

西村 柚菜（伊東出身）「またスポーツをやれる」

車いすラグビー 日本代表 新たな夢を追う



インタビューに答える車いすラグビー日本代表の西村柚菜



実戦形式の練習で汗を流す車いすラグビー日本代表の西村柚菜（手前）＝東京・日本財団パラアリーナ（写真部・堀池和朗）

サッカーから転身

サッカー選手から転身したパラスポーツ界で、急成長を遂げている。18日開幕の愛知・名古屋アジアパラ大会の車いすラグビーに、伊東市出身の西村柚菜（24）＝コムチュア＝が日本代表として出場する。競技歴は浅いが、チーム編成上で有利に働く唯一の女性選手として、大きな働きが期待される。

「サッカーの経験が生きている」。女子サッカーでも「大柄ではなかった」とする体格を生かした加速と小回りの良さに、ゲーム展開を読む空間把握能力を兼ね備える。運動量も持ち味で「動き続けるスタミナ」に自信を持つ。

幼少期にサッカーを始め、県内強豪校で腕を磨いた。「サッカーと関わり続けたい」と指導者も目指していた大学2年時、不運に見舞われた。2022年6月、マット運動の事故で四肢にまひが残る大けがを負った。

「またサッカーをやりたい」と懸命にリハビリに励んだ。だが約半年後、「歩けるようになる可能性は低い」との現実を突きつけられた。「夢を一気に奪われる絶望感があった」と振り返る。

「世界で戦いたい」

そんな中、病室で動画を見ているとたまたま、パラアスリートの競技が目に入った。「車いすでもこんなに動けるんだ」。感銘を受け、パラスポーツ界を次なる舞台に選んだ。「落ち込んでいたのは数日だけ」と持ち前の明るさを取り戻した。

特筆すべきは成長速度だ。けがから約1年後に車いす陸上を開始すると、2種目で日本記録を樹立。ただ障害クラス分類の関係で、陸上ではパラリンピックなど世界大会への出場が難しい。「世界で戦いたい」と25年から本格的に車いすラグビーへの挑戦を決め、瞬く間に日本代表まで駆け上がった。

原動力は「またスポーツをやれる喜び」。男女混合のラグビーは「男子選手にもひけをとらないタックルができる。ストレスフリーで、本当に魅力的な競技」と笑みをこぼす。「代表に選ばれ続けて、一流のアスリートになりたい」。期待の新星は、アジアパラ大会での飛躍を誓う。（岩下勝哉）

激しい衝突が見どころ

車いすラグビーはバスケットボールと同じ広さのコートを使い、1チーム4人。8分×4ピリオド制で交代制限なし。ボールを持った選手が、相手側のトライラインを越えると1点獲得する。使用球はバレーボールと似た球体だが、より固く、表面が滑りにくい。

各選手に障害の程度に応じて0.5～3.5点の7段階の持ち点があり、障害が重い方が数字が小さい。4人の合計が8点以下で構成する。女子選手が加わる場合は合計点が緩和され、0.5点か1点が加点される。

膝の上にボールを乗せて移動できるが、8秒以内にドリブルかパスをする必要がある。攻撃側に時間制限がある。守備型の選手の車いすは前方にバンパーを装着する。パラスポーツの中で唯一、車いす同士でのタックルが認められていて、激しい衝突が見どころの一つになっている。

にしむら・ゆうな

2002年8月23日生まれ。伊東市出身。幼少期からサッカーに取り組み、強豪の聖隷浜松高女子サッカー部でサイドハーフやFWでプレーした。尚美学園大2年時、マット運動で頭部から落下。脊髄損傷により車いす生活になった。リハビリを経て23年7月にパラ陸上を開始。体幹と両脚に重度の障害があるT52クラスの400㍍、100㍍の2種目で日本記録を持つ。25年から本格的に車いすラグビーに取り組む。

【レイアウト】川合弥寿彦

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます